

ご注文はスーパーロボ
ットですか？

お日様ぽかぽか

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ご注文はうさぎですか？ × スーパーロボット大戦

チノが目覚めると、そこは狭いコクピットの中だった。

見たことも無い操縦桿。様々な数値を示す計器。

同じように飛ばされたココア達と共に、様々なロボットとの邂逅が今、幕を開ける！

目次

チノ、大地に立つ	1
一撃の狙撃者物語	16
WELCOME【冥王計画】！	22
わーいわーい悪役！	33

チノ、大地に立つ

「なんですかここは……」

狭いコクピットの中で、幼い少女の声が無機質な空間にぼつりと響き渡った。

目の前には、荒野。奥には草原、更に通り越して山々の稜線が見渡せる。

可能な限り視界の融通を効かせるモニターを胡乱な目で眺めたチノは、ふつと一息吐きながら前のめりにした背中を固いシートの背もたれに戻した。

「なんなんですかここは。モニター、計器、レバーもある。よくわかりませんが、コクピットでしょうか」

いつも着ている中学校の制服が白く身を包んでいる。その身体を脱力させながら、チノは瞳だけをくりくりと動かしして周りの状況を観察した。

確認した通り、身の回り全てが人工物で囲まれている。

無機質な分とつきにくさがありありと浮かんでいるが、大人の男性が座る予定だったらしいシートだけはチノに幾分かの余裕を与えており、それがチノにはさりげなく幸運だった。

「狭いですね……。よくわからないスイッチもいっぱいです。どうして私はこんなと

「ここにいるんだろう」

腕を組んで、しばし考える。が、か細い腕はすぐに身体の横へ戻った。

「全然わかりません。しかしこの唐突な始まりから察するに、これは夢ですね。夢。しかも明晰夢。前に本で読んだことがあります。自分の意識で自由に行動できる夢。まさかこんな形で体験するとは……」

自前の知識で状況を分析したチノは、再び溜息をつくとき、先程よりも積極的に辺りをキョロキョロと見渡し始めた。

「ここがコクピットなら、脱出装置があるはずですよ。どこですか？ まったく、夢ならせめてもうちよつとロマンチックな夢を見せて欲しいものです……」

言いながら足元を探り始めたチノは、しかしコクピット内へ突如響いた少女の声に顔を上げた。

「チーノちゃん！」

「！……ココアさん!?!」

ぱつとモニターを見る。しかし、景色は変わっていない。

「ココアさん!?! どこですか!?! ココアさん!?!」

「……だよ……」

「ど、どこですか!?!」

「右を見てごらん?」

陽気な声がチノの心を走らせる。

無我夢中でレバーを操作したチノは、大胆に動くモニターの景色を左へ流し、ついに目標を視界にとらえた。

「な、あ……!?!」

「やつほーチノちゃん! げんきー?」

視界にとらえた物を見て、チノは啞然とした。

チノの足元から続く、茶色く味気ない荒野。

その少し離れた場所にいたのは、いかにも固そうな人型の巨人だった。

「な、なんなんですかあ!?!」

「ちよつ! チノちゃん大声出し過ぎ!」

「あ、す、すいません……。で、でも、ええ……。う?」

黒い足元。白い太腿。屈強そうな厚い胸元には、黒い鎧に赤い板が二つ、左右に分かれて取り付けられている。

その上。締まった顔には、まるで檻のようなフェイスマスク。精悍な二つの黄色い瞳。特徴的な頭上は大胆に開け放されていて、赤い球体が収まっていた。

「どう!? チノちゃん! これが鉄の城、『マジンガーZ』だよ!」

「ま、マジンガー、ゼット……!?!」

戸惑うチノを置いてけぼりにしながら、ココアの得意げな声とともにマジンガーZが腰に手を当て胸を張った。いかにも『えっへん!』と言わんばかりである。

「こ、ココアさんはどうしてそんなのに乗っているんですか!? 早く降りて下さい!」
「そんなのとは失礼だなー。大体チノちゃんだって『ガンダム』に乗ってるじゃない」
「が、がんだむ……?」

「RX—78—2だな」

チノのkokopittoに、今度はキリリとした声が響いた。

「この声……リゼさん!?!」

「肯定だ」

今度はモニターが左に流れた。しかし、どこを見渡しても姿は見えない。

「ど、どこにいるんですかりゼさん!?!」

「甘いぞチノ。戦場で迂闊に姿を見せるもんじゃない」

「リゼちゃん、かつこいー!」

陽気に茶々を入れるココアの声が、チノの緊張感を震わせる。

しかしあまりに動揺っぷりがおかしかったのか、リゼは通信越しに笑うと、チノに呼び掛けた。

「わかったわかった。姿を見せるから。特別だぞ？」

リゼが言い終わった。すると、チノの正面の空間が、急に揺らぎだした。

「な、なんですか!?!」

「落ち着けて」

リゼがなだめる。その落ち着いた声音は、すぐに姿を纏って現れた。

「わあ！ リゼちゃん！ そのロボット、なあに？」

「これは、ARX-7。『アーバレスト』だ」

「アーバレスト……!」

白を基調とした四肢。黒いパーツがところどころを締めている。

人型をより忠実に再現したような細やかさと体格の良さが、戦場を駆け巡る兵士としての風格を暗黙の内に漂わせていた。

『フルメタル・パニック!』の機体なんだ。ボトムズとどっちにしようか迷ったんだけど、ナイフも使えるこっちの方がいいかなって」

「ほとむず……!」

知らない名称のオンパレードに、チノの頭はくらくらした。

そんなチノを余所に、ココアは「かつこいー! 戦場の兵士ここに現る! ってかんだね!」と褒め、対するリゼはマイク越しに照れている。

いつの間にか近くにはマジンガーZが来ていた。近くで見ると、余計にそのボディは堅牢さを感じさせた。

「これは……夢、じゃ、ないんですか」

思わずチノが呟く。

その言葉に、ココアが反応した。

「夢？」

「だって、さつきまで私達は、ラビットハウスでコーヒーを入れていて……」

「んー？ チノちゃん、さてはねぼすけさんだね？」

「チノ。さつきエルドランっていう人が、このゲームで遊んでくれて言ってきたじゃないか」

「えるどころん……。……。ああー！」

チノの脳裏に、体中を発光させた男性の姿がありありと浮かび上がった。

いつもの通り仕事に励んでいた三人は、突如現れた異星人から各一人ずつゲーム機のような代物を手渡された。これで遊んでほしい。他にも声をかけてある、とは、その宇宙人の言葉だった。

「怪しいとは思ったけど……。いつの間にか起動しちやっつたみたいだし。仕方ないよな」

「全然仕方なさそうじゃありません」

リゼが心なしうきうきと答える。チノの冷静なツツコミが飛んだ。

「異世界に飛ばされるのはこれが初めてじゃないですし、とりあえず安全ならいいんですけど……」

「あ、なんか怪我はしないらしいよ！」

「そうですか」

ひとまず最低限の保証はあるらしい。チノは安堵の息をついた。

きららに召喚された世界とはまた違う世界が広がっているらしい。しかし、曲がりなりに別世界で暮らした経験がチノの心を強く支えた。

「それでも心配なら。おねえちゃんに、まっかせなさい！」

マジンガーが腕をまくり上げた。……ようなジェスチャーをした。

変わらない表情のせいで頼りがいのある雰囲気が出ているが、どうも背後にココアの影がチラついてしまい、チノは呆れの溜息をついた。

「やれやれです。ココアさんは本当に、どこまで行ってもココアさんです」

「あはは。褒められちゃった」

「褒めてないと思うぞ」

そんな折、どすんどすんという音と共に微かな振動がチノ達を揺らした。

「なんだ!? 敵襲か!」

「敵!? エネミーだね!? よおし、ブレストファイヤーをお見舞いしてやるう!」

「待って下さいココアさん。まだ射程が足りません。……あれ? どうして私、そんなこと……」

そんなこんなで言い合っていると、不意に通信が声を拾った。

「……や〜い」

「え? なんですか?」

「待って下さい、リゼせんぱあ〜い!」

チノが導かれるように機械を操作する。すると、正面のメインモニターがかなりの遠方に焦点を絞って、拡大した。

「あ、あれは……?」

「リゼせんぱあ〜い!」

「シャロちゃんだ! やっほ〜!」

どたんどたと走り寄ってくるロボットの全容が見えてきた。

豪胆なフォルムは、マジンガーZに近いものを想像させる。

しかし確かに違うその姿には、一对の鋭角な翼があり、さらに鳥を象った紋章が胸元に描かれていた。

「シャロ。来てたのか」

「よ、ようやく追いついたあ……」

ロボットのなに、膝に手をつけて息を切らしている。その人間味溢れるロボットからは、確かにシャロの声がした。

「先輩、こんなところにいたんですね！ 探しましたよお」

「シャロちゃんもスーパーロボットなの？」

ココアが割って入る。するとシャロのロボットは、姿勢を正して意気揚々とそそり立った。

「そうよ。これが無敵ロボ『トライダーG7』なんだから！」

「すごいです。大きくて、とても強そうです」

「私のマシンガンZも超合金Zは無敵ものだよ！」

「なんか始まった！」

『無敵ロボ』はタイトルの話よ！ それをいうならこっちだってガールニウムを使ってるわ！」

太陽の日差しに、機体が煌めく。

全部じゃないけど、と付け足したシャロの小声をマイクが拾わなかったせいで、よけいにその姿は逞しく映った。

全長五十メートル。この四人の中では、群を抜いて大きい。

チノが乗るガンダムと、ココアの乗っているマシンガンZは同じくらいの背丈で、リゼが搭乗しているロボットは十メートル、もしくは満たないほど小さかった。

「ロボットにも、いろいろあるんですね……」

見れば見るほど細かな部分が違っている。衣装の派手さ地味さに留まらず、素材の硬質具合、翼の有る無しなど。パツと見るだけで個性の違いをチノは認めた。

「そういえばシャロ。千夜はいたか？」

「千夜ですか？ いえ、まだ会ってませんけど……」

「でもこの調子なら、千夜ちゃんもすぐ来そうだねえ」

のほほんとしたココアの声に、シャロが返した。

「あら？ でも、さつき変な男の人から、私とリゼ先輩はペアだって言われたけど……」

「どういうことですか？」

「えつと……。今回はとりあえず、チームに分かれて戦ってもらうって言われて……。私とリゼ先輩が一組、ココアとチノちゃんが二組目のペアだって」

「じゃあ、千夜は？」

「それが……。ううん。どうだったかしら。ああバカバカ！ リゼ先輩の質問に答えら

れないなんて私のバカバカバカバカ!

「シャロ! やめるんだシャロ!」

「そうだよシャロちゃん! トライダーが泣いてるよ!」

頭をぽかぽかしたらしいシャロを反映して、なぜかトライダーもポカポカと頭を叩く。

リゼとココアの制止もあり動きを止めたトライダーは、すぐに涙を引つ込めて堂々とした顔に戻った。

「表情豊かですね……。こういう構造なんでしょうか」

「さあ……。公園に埋まっていたし、よくわかんないロボットよね」

「公園に埋まっていたのか!」

「アナウンスも流れたんですよ? 誰もいないのに律儀に。離れて下さいって」

「謎の多いロボットですね……」

チノが改めてトライダーの顔を見上げる。光の反射か、頬が赤く染まっている、ようにチノには見えた。

「じゃあ、話をまとめるぞ」

「はい! リゼ隊長!」

「隊長じゃないし、ココアは敵チームだろう」

「もお。茶々入れるんじゃないわよ」

シヤロが呆れながらココアを嗜める。チノがマジンガールの頭部を見ると、ココアが照れている様子が見えた。

「私とシヤロ、チノとココアがペア。動かし方はいつの間にかわかっていらしいから省くとして……。お互いに攻撃し合って相手を殲滅するのが今回の勝利条件。で、皆間違っていないか？」

「あつてまーす！」

「私も同じです」

当然のように理解していたルールが、パズルのピースのようにぴったりと当てはまつた。

いつの間に学習していたのかはわからなかったが、これなら動かし方も信用できるとチノは踏んだ。

「ライフは……各自モニターに出てくるのか？」

『肯定です』

「えっ。誰？」

突然、男の声が割り込んだ。

「さ、さあ……。さつきからたまに声が聞こえるんだ」

「リゼ先輩……。もしかしてその機体、誰かの魂が宿ってるんじゃない？」

「ひいひい！ シャロお！ 怖いこと言うなよお！」

「私のマジンガーにも熱い魂がこもってるよ！」

「ココアさんは何で張り合おうとするんですか。やめてください」

突っ込みながら、チノは思考した。

リゼ本人にもわからないことがある、らしい。ということは、全てがインプットされた状態で乗るわけではないということが、可能性の一つとして浮かんだ。

「隠し要素、ですか。なかなか面白いですね」

「なーに？ チノちゃん」

「いいえ。なんでもないです」

「じゃあ私とリゼ先輩は仕切り直して一旦退くから。しばらく経ったら出撃しなさいよね」

「はーい！ またねシャロちゃん！」

「あんた、ホントにわかっているの？ 次会ったら敵同士なのよ？」

「わかってるよ！ 私はチノちゃんの為なら、神にも悪魔にもなる予定だよ！」

「意味がわかりません……」

今度は、チノはマジンガーの方を見なかった。見なくても様子がわかったからだっ

た。

どすん、どすん、と、大きな音を立てて、トライダーが小さくなっていく。広い肩にはりゼのアーバレスト。さながら武将と忍者のようで、チノは背中に手ごわさを見た。

「チーノちゃん!」

右を見ると、マジンガーがこちらを見ていた。

「なんですか?」

「えへへ。ガンバローね!」

輝く、鉄の城。毅然と立つその姿に、チノは今日何度目かの息をついた。

「敵は手強そうです。トライダーにアーバレスト……。あなどれません」

「だいじょーぶ! 私の光子力エネルギーで、チノちゃんを守るよ!」

「やれやれです。あんまり先行しすぎないでくださいね」

両雄が、視線を先に向ける。既に二体の姿は無かった。

広大な土地に、陽炎が揺らめく。青空が、そよ風を運んでくる。

チノは計器を確認した。約束の時間が過ぎようとしている。表示させたマップには、おそらく自分とココアの表示。二つ仲良く並んでいる。

バリスタでもなく、魔法少女でもなく。チノは新しい自分を感じた。

戦場を駆ける。うさぎの如く俊敏に、緊張を解かず冷静に。

すつと鼻から息を吸うと、チノはレバーをぎゅつと握った。

「行きますよ、ココアさん！」

「まじーん、ぐおー！」

気の抜ける声とともに、二つの機体は走り出した。

一撃の狙撃者物語

「ドリルミサイル！ アイアンカタター！」

「甘いわココア！ そんな攻撃で私を倒せると思つて!？」
傍受した通信から、少女達の叫ぶ声が聞こえる。

先程から多彩な技名を連呼するココアの声へ特に注意を傾けながら、頭上から降ろしたスコープの中をチノは静かに見つめていた。

「無駄よ！ この体格差は埋められないわ！」

「まだまだ諦めないよ！ ロケットパンチ！」

見晴らしの良い草原で、二体のロボットが火花を散らす。

数分前に始まったばかりの戦いを見守りながら、チノは詰まる息を何とか吐き出して新しい空気を取り入れた。

(息苦しいですね……)

特に動いているわけでも、操作しているわけでもない。

しかし、いるはずのもう一機に注意を傾けつつ、ココアが作るはずの好機を逃さないよう見張る緊張は、慣れないチノの精神を確かに圧迫していた。

「ミサイルパンチ！ 光子力ビーム！ ルストハリケーン！」

先程からジャベリンを振り回し続けるトライダーに対して、ココアの操るマジンガーZは次々と技を披露していた。豪快に腕先を飛ばすロケットパンチから、腹部より射出されるミサイルパンチ、瞳から出る光子力ビームなど、トライダーを翻弄するように動き回りながら相手を休ませない。

しかし相手もスーパーロボット。簡単には倒れそうもなく、周囲に起きる爆発をものともせず、両手両足でマジンガーに襲いかかる。その様子は、一寸法師を蹴散らす鬼の姿を彷彿とさせた。

「必殺！ 冷凍光線！」

「ああもうココアあ！ そんなに次から次へと武器を使うなー！」

「あれ？ シャロちゃんにも武器がいつばいあるんじゃないの？」

「私のは……その……い、一発百万円もするミサイルなんて打てるわけないじゃない！」

「シャロちゃんはゲームの中でも慎ましやかだね！」

「慎ましやかって言うな——！」

樹木から生える葉で隅が隠される視界の中、チノはシャロの高い声を聴いた。

（シャロさん苛立って来てます。いい感じですよココアさん）

用意された戦闘舞台。自然が広々と展開するマップの中には、荒野、草原以外にも森や湖が配置されていた。

森の外れに機体を横たわらせるチノは、そのうつ伏せになった体勢から、密かに一本の銃口を伸ばす。

一度きりの発射機会。逃すわけにはいかない。

「よっ！ とおっ！」

「またロケットパンチ？ そんな攻撃、効かないわ！」

勢いよく飛ぶ両腕の鉄拳が、むなしくジャベリンに切り払われた。

「ああっ！ 私の両腕があー！」

「チャンス！ ココア覚悟お！」

（ココアさん！）

無くなった前腕の無いマシンガーに、トライダーが間を詰める。

汗一つ流さない鉄の城は、しかしチノには危うく見えた。

（まずい！ 引きますか……!?!）

打てば注意が逸れる。ココアは助かる。しかしいいのか。

一瞬の逡巡が襲ったところで、チノはしかしグツと堪えた。

（いえ、ココアさんならやれます。やれるはず！）

「覚悟よココア！」

「！ シャロちゃん！」

槍の切っ先をすんでで躲したココアに、二度目の突きが迫る。寝転がったマジンガーには回避する余裕が無い。

「これで！」

「まだだよ！」

「えっ!? ひゃん!?!」

上段から振り下ろされる刃に、マジンガーが貫かれようとしたその時。トライダーの体勢が崩れた。

「なっ……ココアあ！」

ジャベリンがマジンガーを逸れて、固い地面に突き刺さる。

巨大ロボットの膝裏へ鉄拳が飛ぶ様子を、チノは見逃さなかった。

「でかしましたココアさん！」

「打って！ チノちゃん！」

定めた照準の中へ砲撃をぶち込むのと、ココアが叫ぶ瞬間はほぼ同時だった。

「あぐっ!?! 砲撃!?! どこから!?!」

頭部に直撃を受けたトライダーが、たまらず身を反り倒れる。

その間に腕を取り戻したマジンガーが、胸を突き出すように両腕を掲げると、トドメの咆哮を叫んだ。

「今だ！ ブレストファイヤー！」

「きやあああああ！」

最大火力の攻撃が、倒れる巨人に注がれる。見るからに高熱を思わせる紅色の光線が、一直線にトライダーへ突き進むと、その巨体を赤く染め始めた。

「このまま戦闘不能へ一直線だよ！」

「そうはいくかあ！」

「リゼちゃん!!？」

マジンガーが揺れ、吹っ飛ばされた。いきなり体当たりを受けた衝撃で、勝利を確信した攻撃が中断した。

「あいたあ！ リゼちゃん！ やったなあ！」

「シャロ！ ナイス踏ん張り！ これでチノの居場所がわかったぞ！」

「せ、せんぴやくい……」

「食らえ！ 五十ミリ散弾銃！」

「うわあああ！ チノちゃん助けてえ〜！」

一対一ならなんとか戦えたマジンガーも、援軍が来てはひとたまりもない。

「ココアさん踏ん張ってください！　すぐに行きます！」

もはや隠れる必要もないガンダムは、すぐにその白い四肢を動かすと、背中に取りつけていた柄を握って走り出した。

WELCOME【冥王計画】！

荒涼とした大地が広がっていた。

走る、砂塵の虚しさ。かつて豊かな草原が広がっていた一帯は激戦の影響で見る影もない。

深々と残る、大地をえぐり取った爪痕の真上には、どんよりとした曇り空が広がっていた。

「……ちゃん……。……ノちゃん！」

声が響いてくる。耳障りな雑音の中から、必死に呼びかけてくる緊張した声。

誰も応えない。それでも、傍受した音声は、シートに座りこんこんと眠る一人の少女を呼び続ける。

硬い椅子。無機質な操縦席。

あどけない唇を微かに開きながら瞳を閉じる青髪の少女は、深い夢の中にいた。

「……チノちゃん！」

呼ぶ声が、奇跡的に無数のノイズを潜り抜けた。

同時に、微かな振動がコクピット内を走る。意識の抜けた身体を動かす程ではないに

しても、その揺れは少女の意識に覚醒を促した。

「う……………」

再び、微かな揺れが襲う。

チノは睡眠を邪魔する揺さぶりに細い眉を寄せた後、次第に瞼をそつと開いた。

「あれ……………」

霞む視界に、焦点が絞られていく。

しばらく呆けていたチノは、三度目の振動を迎えると同時に、その瞳を大きく広げた。

「あ……………」

乱れるメインモニター。色と形が歪み続ける正面の液晶に映っていたもの。

それは、ボロボロのマジンガーZだった。

「つ……………！ ココアさん!? ココアさん!!」

重力で背もたれに押し付けられる窮屈な姿勢を強いられていたチノだったが、必死に伸ばす腕で操縦桿をつかみ取ると、一気に引いて機体を動かした。

「ココアさん!! ココアさん!!!」

マジンガーZはチノを覆うようにそびえたっていた。白い両腕を伸ばして、まるで包み守るように空へ背を向けるマジンガーは、胸についている片方の放射板が壊れ、肩や腹部にも損傷が見られる。

チノがガンダムを起き上がらせると、反対に鉄の城は滑り落ちるように脇へ動いた。そして、すぐに四度目の振動がくる。それはマジンガーZが背中を地に着けた証だった。

「ココアさん！ ココアさん！」

チノが叫ぶ。しかし、向こう側から通信がこない。

慌ててマジンガーの頭部を確認しようとカメラを動かしたところで、違う声がチノに響いた。

「チノ！ 無事か！」

「リゼさん!?!」

背中を抜ける声が響き、思わず手が止まる。

紫色の声は、今、緊張に満ちていた。

「チノ！ ココアを連れて早く逃げろ！」

「ど……どういうことですか!?! 何があつたんですか!?!」

「千夜が来た！」

「千夜さんが……?」

チノの脳裏に、和服姿の娘が浮かんだ。緑に白い水玉模様が、優しい笑顔で手を振っている。

繋がない。チノは叫ぶように問いかけた。

「どういうことですか!」

混乱しながらも、会話と作業を両立させる。

動かないスーパードロボットの肩を抱き寄せたチノは、すぐに新たな情報で頭の中がいつぱいになった。

「千夜が奇襲を仕掛けてきた! 圧倒的だ! 早く逃げろ! 二時の方向に敵が見えるか!」

「二時……!?!」

光るパイルダーのkokopitt。中の様子を十分に伺えないまま視界を動かすと、離れたところに巨大ロボットがいた。

「シャロさん!」

「チノちゃ……きやああ!!」

「シャロお!」

トライダーが、倒れる。圧巻だった。自身が駆るガンダムの三倍以上を誇る巨体が、衝撃を受けて背中側から地面に伏した。

「シャ……シャロさああん!!」

五度目の振動。地震のような、唸る地響きが世界を揺らす。

そして開けた先の向こうには、高らかな崖と、一つの機体が雄々しくそびえていた。

「あら。チノちゃん？ 無事だったのね！」

チノは目を瞬いた。

「千……千夜さん!？」

「ぴんぽーん。大正解！」

声の調子は、まったく軽い。馴染んだ安らぎは耳に残っている声となんら変わらな
い。

しかし、状況の違いが、かえって背筋をぎわつかせた。

「シャロちゃんはこれでおしまいね。頑張ったけど、残念だわ」

あんなに遠くから倒したというのか。チノは戦慄した。

ココアと二人がかりでも中々倒せなかったトライダーが、今日の前で停止している。

「千……千夜さん!？ そのロボットに乗っているのは、本当に千夜さんなんですか!？」
たまたらず、チノが叫ぶ。しかし、微笑む声は落ち着いていた。

「あらチノちゃん。本当よ？ 今回は私が、この世界のボスキャラよ」

「な、なに言ってる……」

戸惑っていると、機体が消えた。

そして、すぐ近くに現れた。トライダーと、自分たちとの、境目。

「ふっふっふ……。ひれ伏すがよい！ 我こそは、『天のゼオライマー』！」
「チノお！ 危ない！」

掲げられる、白い左手。甲に光る、丸い球体。

カアン、と鐘が響き渡ると、チノの目の前で空間が揺れた。

「うわああああ!!!」

チノたちの真横を、重い物体が転がっていく。後方で止まったそれを見ると、リゼの乗るアーバレストだった。

「リ……リゼさん！ リゼさん!!」

動かない。守ってくれた疾風の兵士も、瞳から生気が失われていた。

「また一人、撃墜ね♡」

視界を戻す。悠々と立つ、ゼオライマー。

白刃の機神。翼のように広がるいくつもの羽。歴史と威厳を喚起させるその装飾は、チノの脳裏に禍々しく刻まれた。

「創造主にして、冥府の王……。いやだわ、新しい案浮かんじやった♡」

「千、千夜さん！ ひどいです！ いくらなんでもひどすぎます！」

チノの視界が、歪んでいた。

「チノちゃん？」

「シャロさんも、リゼさんも……。ココアさんまで！　こんな、こんなことつてないです！」

パイルダーの中では、くったりとしていた。おそらく、呼びかけても応じない。

「許せません……………！　こんなこと……………！」

マジンガーの背中を、そつと下ろす。やはり、動かない。

「こんなことして！　何になるんですかあ!!」

バルカン。しかし消える。砲撃は空を切った。

「チノちゃん」

声がした。見ると、先ほどより奥にゼオライマーが立っていた。

「千夜さん……………！」

「悲しいわ。たとえゲームでも、ここまでチノちゃんに恨まれるなんて……………」

砲撃。有無を言わず、バルカンで追撃する。しかし、当たらない。

あまりに早い速度だった。微動だにしないまま、仁王立ちで避けられる。

「くっ……………！」

「でもね、誰かが終わらせないといけないの。今回は、それが私の役目」

「このお！」

キリがない。判断を下したチノは、少し離れたところに落ちていたライフルを移動し

て掴むと、標準を定めて狙い撃ちした。

が、消える。理不尽なほど当たらない。

「なぜ!! どうしてですか!!」

「次元連結システムのちよつとした応用よ♡ 冥府の王は伊達じゃないわ」

「当たってください!!」

消える。消える。消える。そして、出現。出現。出現。

不規則な出現パターン。激昂するチノをからかうように、千夜は調子を崩すこともなかった。

「うふふ。無駄よチノちゃん。エネルギーが尽きるだけだわ」

「!」

見る。確かに残量は、少なくなっている。

「でもっ……」

「えいつ♡」

カアン。鐘が鳴った。揺れる。あつ、と思う間に、見えない衝撃波がガンダムを飲み込んだ。

「わあああああ!」

激しい揺れだった。これまでのどの揺れよりも暴力的な衝撃。

「! 足が……!」

動かなかった。ガンダムが、立てない。

「チャージなどさせない。……って、チャージするものはなかったわね」

「千夜さん!」

見ると、正面にいた。

差は、明らかだった。

「ふっふっふ。チノちゃん。塵一つ残さず、消滅させてあげる!」

「うわああああああああああああああああ!」

その時だった。両腕を掲げたはずのゼオライマーが、チノの前から消えたのは。

「な、なんですか!」

ゼオライマーが立っていた場所に、赤い熱線。それが終わると、土がドロドロに溶け

ている。

「増援ね。遊び過ぎたわ」

千夜の声が響く。生きている。

「……鉄の城が敗れた時。新たな魔神が、雷鳴と共に現れる……」

頼れる、凜々しい声。しかしどこか楽んでいる。

「でもでもこちらも捨てがたい。優柔不断に揺れる心。人それを、『迷い』という」

「だ、誰ですか!? 姿を見せてください!」
声の主は、虚空から。

さきほどまではゼオライマーがいた地点。崖の上に太陽が、その一点だけを照らしている。

そこに、いる!

腕を組んで立つ。生身の、少女が!

「違うわチノちゃん。こういう時はね……………何奴だあ! 名を名乗れい!」

「とうっ!」

跳躍。そして、ガンダムの前に現れた!

「千夜ちゃん! 私は……………私です!!!」

「本当にだれ……………!」

思わず突っ込んだチノに変わって、千夜が挨拶した。

「モカさん! お久しぶりです♡」

「千夜ちゃん久しぶり! 元気してた?」

「まさかモカさんが来てくれるなんて! 嬉しいです!」

「なんで普通に会話してるんですか。どういふことなんですか!」

チノの呆然とした眩き。モカは、咳払いをして仕切りなおした。

「おっと！ 千夜ちゃん、私のカワイイ妹達を苛めるなんて！ 成敗してやる！ ケンリユウウウウ！」

マスクが、モカの口元を覆う。稲妻が、青いロボットを出現させる。

「天よ地よ、火よ水よ。我に力を与えたまえ……！」

モカの叫びが、雷鳴を呼ぶ。

時空が揺らぎ、完成する！

「パアアアアイル・フオオオオウ、メイシヨン!!!」

わーいわーい悪役！

「ふん。一体何をやっているんだかねえ」

逆光に身を包んだ戦士が、冥府の王へ飛び掛かるその頃。

遙か数百キロも離れた場所から、成り行きを見守る細目の老婆がいた。

「窮鼠猫を噛むって言葉、知らないのかい」

老婆は、親指と薬指で作った環の中を左目で覗き、遙か彼方で行われる闘いをつぶさに観察していた。

山の急斜面にそそり立つ、数十メートルはあろうかというほどの木の頂点で、器用に座り続ける。その様子はさながら、ある境地へ辿りついた仙人のようだった。

「まったく。千夜の遊び癖には困ったもんだよ」

「でも、楽しそうですな〜」

「そうだね〜」

悪態をつきながら、離そうとしない視線。

そんな老婆のすぐ近くから、女性の声がふたつ、上がった。

「圧倒的な怪物に立ち向かう、天空よりの使者……。なんとも心が騒ぎ出します〜！」

「誰なんだろう、あの人。すごく健闘してるね〜」

肩までかかる髪が緩やかに波打つ女性は、微笑みながら左手を頬に当てた。

一方で後ろ手を組みながら見守る少女は、同じく微笑んではいるものの、油断を見せない雰囲気を見せている。

背中には、黒く、長い筒状の物が伸びていた。

「ふん。こんなに時間をかけてちゃ、いつイデが宇宙怪獣を差し向けるか、わかったもんじゃないよ!」

老婆はそういうと、区切りをつけて立ち上がった。

「凜! 凜はいるかい!」

「は、はい! おばあちゃん!」

そして大声で呼びかける。響く音量に慌てた様子の彼女は、さきほど頬に手を当てた女性の近くから姿を現した。

「凜! あそこで遊んでる千夜達に、こいつをぶつけてきな!」

パチン、と、指が鳴らされる。

その瞬間、山が揺れた。驚く鳥達が一斉に空へ逃げ惑うと、去ったその地には異形の怪物が存在した。

「(、)それは!」

「DG細胞で作り上げた第三使途だよ！　これをあいつらにけしかけてきな！」
黒い身体に、能面のような顔。

異常に細い手足を支える巨大な肩にも、覆うように能面らしきものが纏い付いている。腹部には赤い球体が光っていた。まるで肋骨のように生えた白いなにかに支えられながら。

「い、いいんですか!?　デビルガンダムで作ったサキエルとはいえ、破壊力は十分ですよ!?!」

「いいんだよ。いつまでもチュートリアルのままでもいられても困るからね！」
凜の戸惑いは、老婆がぼつさりと切り捨てた。

「いいですね〜！　死力を尽くして戦う戦場に、第三の敵。心が燃え上がります〜！」
「死ぬなく。リゼ〜」

突然現れた怪物にも、全く動じない二人。

それどころかワクワクと胸を弾ませる両者を見て、凜はがつくりと首を落とす。

「さ、グズグズするんじゃないよ！　さっさと使途をぶつけて、小娘たちの度肝を抜いてきな！」

「は、はあい！」

微笑みを崩さない天然悪役ムーブ作家と吹屋娘に代わり、ド真面目一直線の凜は、涙

目になりながらも老婆の命令に従うのだった。